武村豊さんについて

昭和4年（1929年）1月　沖縄県那覇市出身。

1944年10月10日の空襲で家を失い、その後、戦争の現実味が増した。翌3月から沖縄戦が始まると、病院壕で銃弾に倒れた負傷兵の手当てにあたった。野戦病院の壕の中では、手術のときだけローソクを使っていました。そのローソクを持つ係りが、私でした。

手術と言っても負傷した兵隊の手足を切り落とすのが、その大半です。麻酔がなくなると、「生切り」といって麻酔なしで行われました。

6月4日、学徒隊は「解散」を命じられ、少女らは散り散りになった。武村さんは、夜は安全な場所を求めて歩き、昼は米軍に見つからないように木の下や岩陰に潜んでいたという。

一番困ったのは食べる物がないこと。「唯一あったサトウキビも米軍の火炎放射器で手当たり次第に焼かれた。真っ黒くなった焼け跡で、土の中から根の部分をほじり出し、しゃぶっていた」。水を頼り共同井戸に行くも、死体だらけだった。「おしっこを飲んだという人もいたらしいが、それだけはできなかった」という。